HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 〈婚活〉する乙女たち : 新「婚姻法」時代の連環画 |
| Author(s) | 田村, 容子 |
| Citation | 連環画研究, 2, 16-36 |
| Issue Date | 2013-03-10 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/2115.98389 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/98389 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | renkanga_2_16-36.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第２号　2013年３月

# 〈婚活（コンカツ）〉する乙女たち
## ――新「婚姻法」時代の連環画

田村 容子

★「よりよい結婚」に悩む人々

〈婚活〉――2007年11月、初めて世に登場したこの言葉は、2008年、2009年と二年連続で「新語・流行語大賞」候補にノミネートされ、現在でもしばしば耳にする。就職のために活動するのが〈就活〉なら、結婚のために活動するのが〈婚活〉。提唱者は、「よりよい結婚を目指して、合コンや見合い、自分磨きなど、積極的に行動をする」ことであると説く。

日本に〈婚活〉なるものが出現した背景には、まず結婚相手を自分の意思で探すことができるという前提がある。その選択の幅が広がった結果、未婚・非婚・晩婚化が進んでいる現在、少子化対策を意図して提唱されたのが〈婚活〉である。一生単身でいることも含め、「よりよい結婚」の中身も千差万別であろうが、近年では数少ない社会的・経済的な成功者を獲得するための活動、と読みかえられているようだ。

さて、これから見ていくのは、1950年5月1日に発布された新「婚姻法」により、「よりよい結婚」を探し求めることになった人々の物語である。婚姻法とは、婚姻の自由、一夫一婦制、男女の平等などを定めた中華人民共和国最初の法律である。もっとも、これらを定める法律は、1949年の建国前から存在していた。1931年5月には国民政府が一夫一婦制を定めており、1934年4月には、中華ソビエト政府が婚姻の自由、封建的な婚姻制度廃止を盛り込んだ婚姻法を発布している。1950年の新婚姻法は、それらに加え、離婚の自由を明文化したところが新しかった。

それまでの中国では、「包辦婚（パオバンフン）」という家長同士の取り決めによる結婚が広く行われていた。未婚の男女が結婚相手を自分で選ぶことなどできず、女性の側から離婚を申し出ることもできない。そのため、婚姻法が作られたとはいえ、普及には時間がかかった。とくに農村では、長く続いてきた慣習がすぐには変わらず、末端の党幹部は婚姻法を正しく守らなかった。1953年には、共産党政府により「婚姻法貫徹運動」と

いうキャンペーンが行われたほどであり、この時期に離婚件数が急激に増加したという。その離婚模様については、武田雅哉氏の「小人書林迷走録」第3回を参照されたい。

新婚姻法の普及を目指して作られたプロパガンダ芸術として有名なのは、「評劇」といううた入りの音楽劇を映画化した『劉巧児（リウチアオアル）』（集体改編・何孝充執筆、伊琳監督、1956）であろう。

ヒロイン劉巧児は、労働模範の趙振華を見初める。しかし、彼女にはすでに、親の決めた顔も知らない許嫁の“柱児”がいた。劉巧児の父親は、彼女に目をつけた地主に金を渡され、娘の婚約を破棄する。もとよりこの婚約には乗り気でなかった劉巧児だが、実は彼女の恋する趙振華の幼名こそ“柱児”であった。今や地主に嫁がされようとしていることに気づいた劉巧児は抵抗。一方的に婚約を解消された趙家の父親は、劉巧児を略奪し連れ去る。趙家の「略奪婚」、劉家の「売買婚」は県政府の裁きで非合法とされるが、劉巧児と趙振華の自主的な婚姻は無効と見なされる。しかし、省人民政府の馬専員の熱心な聞き取り調査により、最後には地主が裁かれ、二人は結婚する。

この映画で、劉巧児と趙振華が結婚の意志を確認する場面は、二人のうたの掛け合いによって表現される。主演女優新鳳霞の回想を読むと、「劉巧児」という女性像を作るために、彼女が様々な演技上の創造を行なったことがわかる。たとえば、評劇が得意としていた泣き調子の型をやめ、もともと湿っぽかった評劇のメロディーを、軽快なものに改めた。清楚可憐な新鳳霞の魅力、ラブストーリーへの憧れ、音楽のなじみやすさなどの要因が相まって、『劉巧児』は人々に愛され、そのうたは人口に膾炙したのである。

では、劉巧児の結婚は、はたして「よりよい結婚」だったのだろうか。この時代の「よりよい結婚」とは、中国共産党のイデオロギーに従った結婚にほかならない。劉巧児の場合、地主をしりぞけ労働模範の趙振華を選んだ点は、望ましい階級の選択といえよう。しかし、もとはといえば趙振華は、親の決めた許嫁の“柱児”である。それでは、「包辦婚」から抜け出せていないのでは…?

この点について、中国の演劇研究者傅謹は次のように指摘する。「このような処理はドラマ性を高めるためのように見える。だが、さらに重要なこととして、婚姻の自由と親の命令との間にある緊張感を有効に消し去ったのだ」。

婚姻法ができたからといって、人々の観念、とくに親世代の頭の中は、そんなに急には変わらない。選んだ相手が、たまたま親の決めた許嫁と同じだった！——この好都合により、劉巧児は親のメンツをつぶすことも、隣近所に後ろ指をさされることも

なく、自分の好きな相手と結婚したのである。古い慣習と新しい制度の間で葛藤する乙女にとって、おそらくこの親への「孝」と党への「忠」を両立させる状況は、理想的であったにちがいない。もっとも、このような過渡期的状況を映画に描くことができたのは、毛沢東が「共産党への批判を歓迎する」と宣言した「百花斉放・百家争鳴」時期（1956 年 4 月～1957 年 5 月）だったことを考慮に入れる必要があるだろう。

『劉巧児』に見られるように、新婚姻法を描くプロパガンダ芸術は、「よりよい結婚」というゴールが党の方針によってあらかじめ設定されている。したがって、そこに向かう過程こそが見どころとなり、その中には、過渡期的状況に身を置いて右往左往する人間心理が描かれる。1951 年創刊の雑誌『連環画報』にも、断続的に新婚姻法普及のための連環画が掲載され、「よりよい結婚」をめざして思い悩む人々が登場する。新婚姻法連環画の主人公は女性であることが多く、それぞれが直面する選択肢、「よりよい結婚」のために行う〈婚活〉の中身はなかなか興味深い。次に、その一端をご紹介し、1950 年代の中国の人々に与えられた「よりよい結婚」像とその変遷について眺めてみたい。

★新婚姻法連環画特集号

1951 年 5 月（実際には 6 月だという）に創刊された『連環画報』は、現在まで発行されつづけている連環画専門誌である。1960 年に一度停刊し、それまでは半月刊であった。1973 年 7 月の「試刊」を経て、同年 10 月に復刊後は月刊誌となる。2011 年には、創刊六十周年を記念し、1960 年までの影印本が人民美術出版社・連環画出版社・『連環画報』編輯部により刊行され、たいへん参照しやすくなった。

『連環画報』は雑誌なので、単行本の連環画のように一頁に一コマが描かれるわけではない。連続した数コマが一つの頁に載せられ、番号順に読んでいく形式である。コマ割は均一で、ふつう大小などの変化はつけられていないが、枠線のないもの、彩色されたものも見られる。掲載作は短編が多く、長編は抜粋または連載されることもある。長寿雑誌ゆえ、連環画の形式、内容における変遷を知るには格好の資料といえるだろう。

この『連環画報』に、最初に新婚姻法連環画が掲載されるのは、1951 年 11 月 16 日発行の第 12 期である。この号は、つづく第 13 期（12 月 1 日発行）とともに新婚姻法連環画特集号となっており、表紙の「結婚典礼（新夫婦用印）」から、裏表紙に掲載された二コマ連環画「婚姻大事」まで、全編婚姻法がらみの図像で埋めつくされている。



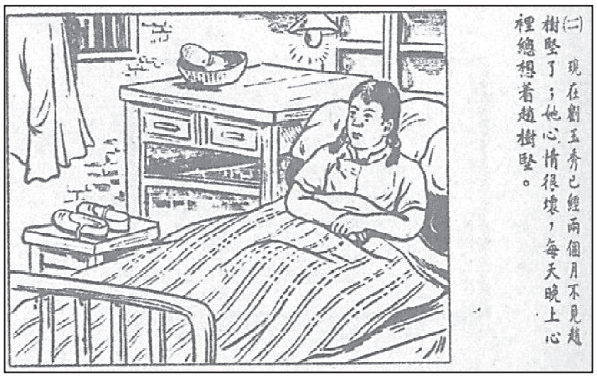

「結婚典礼」（羅工柳画）【左上】に描かれるとおり、新婚姻法によって結ばれた二人は、毛沢東の肖像画のもと、胸に花をつけ、群衆の前で結婚証書に署名する。毛沢東の肖像・胸の赤い花・見守る群衆・結婚証書は、ほとんど新婚姻法を示すシンボルのようになっており、連環画の中でもしばしば描きこまれる小道具である。これは、中華民国期の婚姻手続きが公開の儀式と証人によって認められたのに対し、1950年の新婚姻法では、区政府での結婚登記と、結婚証書の受け取りが義務づけられたことをあらわしている。

1951年の新婚姻法連環画特集号で特筆すべきは、童養媳（トンヤンシー）と寡婦の悲劇を描く物語の多さだろう。童養媳とは、男児を持つ家が幼女を買い取り、小さいうちは子守や家事をさせ、大きくなったら嫁にするという「売買婚」の一種である。

第12期掲載の「婚姻自由」（草明原作、亦若改編、肖林画）のヒロイン劉玉秀は、雑貨店を経営するおじの家で使用人同然にこき使われて育てられた。彼女は隣に住む郵便配達員趙樹堅と恋仲であったが、玉秀を働かせながら、いずれは資産家に嫁がせて利を貪ろうとするおばのたくらみにより、引き裂かれてしまう【左下】。




このコマでは、おばの想念がフキダシであらわされているが、これは連環画としては原初的な表現方法といえよう。おばの計画がまさしく図解されているが、時代を経ると、よからぬ想念は人物の表情や影など、より複雑な絵画コードの組み合わせによって描写されるようになる。







さて、ふた月もの間樹堅に会えず、思い悩む玉秀【左上】。

連環画の中で思い悩む人物は、このように布団の中で考えるポーズをとっていることが多い。ベッドの脇には脱いだ布靴が置かれている。「靴を脱ぐ」、「寝床に入る」といった行為は、中国人が独りになって己を見つめる「プライベート空間」をあらわしていると考えられる。

やがて、労働組合で婚姻法を知った樹堅は、「人民法院」に玉秀のおじを訴える。審問の日、緊張して言葉の出てこない玉秀に、裁判官の女性党員は婚姻法を説いて聞かせる【左下】。

この物語は、裁判によって玉秀と樹堅の結婚が認められ、玉秀の労働の見返りに、おじの財産から結婚費用を出すことになってメデタシ、メデタシとなる。

審問の場面では、部屋の後方の壁に「婚姻法」という文字が見えるが、その条文は「…」と表記されていて読めない。字の読めない玉秀は、裁判官の話すフキダシの言葉によって婚姻法の中身を知るのであり、この連環画において手紙や張り紙の中の文字は、すべて「…」と処理されている。「婚姻法」だけが読める文字として書かれているのは、玉秀にとって（ひいては読者にとって）その三文字が覚えておくべき重要な漢字のすがたかたちであることを示しているのである。

ところで、魯迅の小説『祝福』（1924）には、寡婦祥林嫂が再婚して二夫にまみえたため、あの世で閻魔さまに鋸でまっぷたつにされる、と聞かされるくだりがある。かように寡婦の再婚は忌み嫌われ、たとえ婚姻法によって認められていたとしても、人々の意識はなかなか変わらなかったようである。

第 13 期掲載の「官百忍和陳儐」（「官百忍と陳儐」、施碩年編、墨浪・卜孝懐画）では、やもめの官百忍と寡婦の陳儐が再婚しようとするが、隣組に受けつけてもらえない。やがて区政府の幹部叢瑞科が来るというので喜んだのもつかの間、叢は二人を










罰するために紙の三角帽をかぶらせ、町内引き回しか、町内大掃除をさせることを提案する。拒否すると、叢はさらに、二つの巨大な石柱を倒してみろ、と無理難題を吹っかける。この腐敗幹部による嫌がらせは、後年の文化大革命を先取りしているかのようであり、叢瑞科の表情はうっすらと微笑んでいる【左上】。

追い詰められた二人は、有毒の「断腸草」を食べて心中【左中】。

女性の自死といえば、中国の文芸では首をくくって幽鬼となるのが相場だが、ここでは心中のためか服毒死が選ばれている。結婚の登記を経ていない以上、どちらかの部屋、すなわち「プライベート空間」で縊死することは身の潔白に関わる。それゆえパブリックな野外を選んだという事情も、ここにはあるのだろう。

彼らの死は、群衆に叢のやり方が間違いであったことを気づかせ、最後には「人民法院」により、叢は徒刑五年に処せられる。

一番おしまいのコマでは、子供らが二人の死を嘆く場面が教訓としてフキダシの中に入れられ、連環画の物語世界に外枠がつけられている【左下】。

このような手法は、悲劇を大団円で終わらせる「伝家の宝刀」ともいえるが、プロパガンダのための視覚芸術にしばしば見られるものでもある。たとえば、映画『武訓伝』（孫瑜監督・脚本、1950）は、教師が子供たちに武訓の故事を語る体裁をとる。1951年以降、大々的な批判運動にさらされたことで有名なこの映画だが、孫瑜の回想によれば、教訓として「引用」する場面には、それがプロパガンダであることを示す意図があったという。すなわちこの手法は、プロパガンダ芸術が為政者と鑑賞者双方に対し、自己の正当性を示す身ぶりであると考えられる。

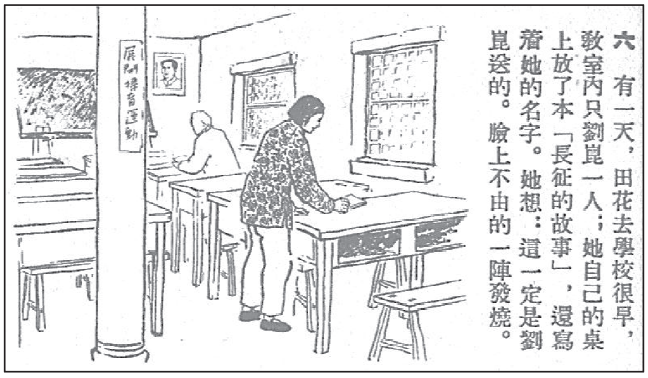
第13期掲載作品は、新婚姻法の普及の中に、末端の党幹部に巣くう封建思想との闘争というテーマが盛り込まれていることが特徴である。

このように、最初の新婚姻法連環画特集号である第12期・第13期には、童養媳の悲劇、寡婦の再婚、群衆や共産党内部に残る封建思想という新婚姻法連環画の基本的な語りの形式がおおよそ出そろっており、新婚姻法について初歩的な知識を得ることができるのである。

## ★〈婚活〉する乙女たち

さて、その後も『連環画報』は断続的に婚姻法や結婚を描く連環画を掲載するが、時はまさに朝鮮戦争の最中である。「抗美援朝」など普及すべきスローガンがほかにもあり、次に新婚姻法連環画特集号が刊行されるのは、1953年の第42期（2月16日）・第43期（3月6日）をまたねばならない。

第43期掲載の「美好的生活」（「すばらしい生活」、碧野原作、肖林・江熒・向陽・関山集体創作）は、政府に納める穀物を運ぶ途中、天秤棒が折れて困っているヒロイン高田花を、隣村の「互助組」組長劉崑が助ける運命の出会いによって物語が始まる。

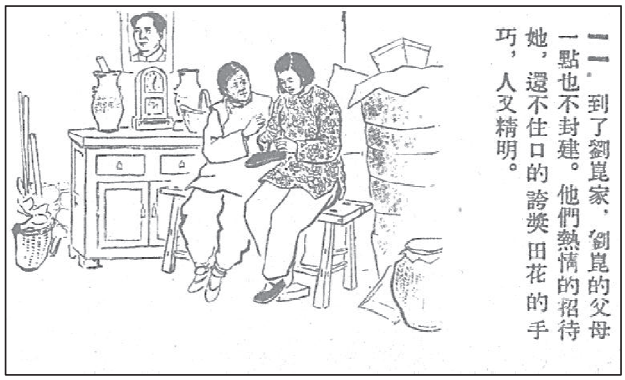



双方、気になる相手のことを婦女会主任の雲香に問い合わせた結果、同じ「冬学」（農閑期に読み書きを習う学校）に参加していることがわかった。ある日、田花が学校に行くと、机の上に『長征の物語』という本が！きっと劉崑の仕業だわ、とピンときた彼女は頬を染める【左】。

教室には毛沢東の肖像画が掲げられ、柱の張り紙には「掃盲運動を展開する」のスローガンが見える。

その後、新婚姻法連環画の常として、眠れぬ夜を過ごした田花は、翌朝早く文具店に走り、赤い表紙のノートを買う。帰り道で、ある心配事が田花の頭をよぎる。

「劉崑の両親は、古臭い封建頭じゃないかしら？」




ちょうど布靴の留め金がとれてしまったので、彼女は劉崑の家に行って針と糸を借り、ついでに家庭状況を偵察することを思いつく。さっそく劉崑の家に行ってみると、両親はまったく封建的ではなく、田花のことを手先が器用で頭がいいとほめてくれるのだった【左上】。

その後、雲香の口から、「劉崑って人はそんじょそこらにはいない若者よ、政治・労働・学習、どれをとってもすごいんだから。この条件でもまだだめなの？」と聞かされた田花。口では「考えてみるわ」と言ったものの、心はすっかりその気である。ノートのほかに自分の気持ちを伝える贈り物として、夜なべしてお手製の布靴を作るのだった。




田花の贈り物は雲香に託され、劉崑のもとに届けられる。「互助組」の代表大会の前、劉崑は田花も来るとわかっていて新しい布靴にはきかえ、赤い表紙のノートをわざと袋からチラリと見せる【左下】。

ここまでのところ、教室、劉家の居間、劉崑の部屋にそれぞれ毛沢東の肖像画が掲げられていることにお気づきだろうか。もちろん、田花の部屋にも同じものがある。肖像画は縁結びの神さまのように、画面の片隅でいつも二人を見守っており、あとはお互いの気持ちを打ち明けるばかりである。

やがて、告白の時が来た。しかし、ひとけのない村はずれで語りあう男女を牧童が発見、人を呼びに行ってしまう。あっという間に集まった十数人の女子。後ろに人がいることにも気づかず、劉崑は田花に、好きな相手はいる？ と問う。「うん」と答える田花。「どんな人？」「あんたみたいな人」。




この甘酸っぱいやりとりは、木に隠れて盗み聞きしている女子たちを、大爆笑の渦に叩き込んだのであった【左】。

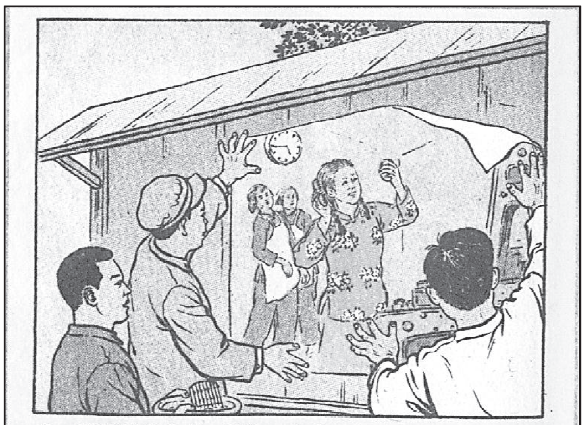
最後はもちろん、毛沢東の肖像画の前で婚礼である。

初期の新婚姻法連環画とは異なり、ヒロインは字も読めれば労働や「互助組」活動にも励み、積極的な性格をしている。「よりよい結婚」のために、相手の素性、両親の思想、そして条件をしっかり吟味し、自ら偵察行動に出ることも辞さない。

「〈婚活〉する乙女」を描く新婚姻法連環画の誕生である。

ヒロインの行動力、とりわけノートや布靴を贈ったり、針と糸を借りる口実で未来の婚家をのぞきに行ったりする行為は、少なからず当時の乙女たちに影響を与え、模倣するものもあらわれたのではないだろうか。

この頃から、新婚姻法連環画の語りはバリエーションを増やし、その中にラブストーリーや噂話の要素を含んでいく。たとえば、漫画絵師を描く作品として面白いのが、第 54 期（1953 年 8 月 21 日）掲載の「漫画」（育英編、林雲巖・趙宏本・黎熾昌画。彩色）である。紡績工場で働く鳳先と王明、二人が恋仲であるという噂が広まると、女工たちはみな鳳先を羨ましがった。というのも、王明はすぐれた保全係で、アイデアマンであるばかりか、漫画を描くのも上手なのである。



九　漫畫貼出去了：鳳先正在車檔裏看着車間的大掛鐘，慌慌張張的左手拿着小圓鏡，右手用個大紅桃子桃着頭，車上白花亂飛她也不管。



一五　鳳先一邊哭一邊埋怨王明說：「你不愛我就直說，何必用漫畫諷刺我呢？而且把我畫成那副怪像……！」王明解釋那是大家的事，大家都希望她改正缺點。

職場の壁新聞絵師でもある王明は、ある日の編集会議で頭を抱える。なんとガールフレンドの鳳先は、終業時刻の三十分も前から身支度をして労働時間を無駄遣いしており、そうした工員の典型として彼女を批判する漫画を描かねばならなくなったのだ【左上】。

出勤して壁新聞を見た鳳先は、王明を問い詰める。

「あたしを嫌いになったんならそう言ってよ、漫画で諷刺しなくたっていいじゃない。あたしのことをあんな変なふうに描いて…」【左下】

ここで示されるように、連環画に描かれる恋人同士の語り合いは、おおむね野外で行われることになっている。大樹の木陰は群衆の目から二人をさえぎると同時に、開かれた場所として交際の健全さを保証する。前述したようにのぞき見される危険性もなくはないが、いわば「セミプライベートな二人の空間」を作り出しているのである。

王明はさすがに機転の利く男である。すぐさま鳳先に「二人でいっしょに進歩しよう！」と宣言し、職場の宣伝委員に壁新聞を規定どおり五日間貼ってほしいと申し入れ、公明正大な姿勢をアピールする。結局、五日目をまたずして壁新聞の上には吉報の号外が貼り出され、二人の婚礼が挙行されたのだった。

重工業の生産力向上を目指す「第一次五ヵ年計画」（1953 年～1957 年）の始まったこの時代、「より早く五ヵ年計画を完成させる」というスローガンの前では、たとえ交際相手であっても不正を見逃すことは許されない。




第 81 期（1954 年 10 月 6 日）掲載の「金芳和小馬」（「金芳と小馬」、本報文字通訊員摩西改編、琦平画、費礼文の原著にもとづく）は、機械工場で成績トップの女工金芳が、ライバルに勝つために婚約者の小馬に新しい旋盤バイトの設計を依頼し、その技術を同僚に隠して独占する姿を描く【左】。

だが、工場の団支部書記でもある小馬は、会議で金芳を厳しく批判し、やはり二人の仲は危機を迎えている。

この作品を改編した「本報文字通訊員」とは、第 43 期より誌面で募集された一般投稿者である。募集広告によれば、その任務は「毎月少なくとも一編の草稿（生活故事または連環画脚本）か状況を反映した資料を送ること」、「群衆の『連環画報』に対する意見を集めて本誌に反映させること」、「毎月手紙か原稿で編集部と連絡をとること。三カ月間連絡をとらないものは、通信員の資格を失う」といった内容である。報酬として、『連環画報』一部、通信員用の刊行物、稿料が与えられたようだ。この通信員制度の開始により、『連環画報』の掲載作品は、プロパガンダの中にも、読者にとって身近な話題や事件、人物像を盛り込むことができたのではないだろうか。

★「合作社」時代の新婚姻法連環画

「第一次五ヵ年計画」と同じ時期、中国では農業・手工業・商工業の社会主義モデルへの改造が進められた。この時代、中国の農村では、労働力を相互に交換する「互助組」から、土地や農具、耕作用の家畜を差し出す「初級農業生産合作社」、土地などの生産手段を集団所有とし、集団労働を行う「高級農業生産合作社」など、新しい形の経済組織が次々と作られていった。「合作社」はやがて、1958 年に「大躍進」が始まると「人民公社」となり、「工、農、兵、学、商」が一体となった政治・経済組織となる。

新婚姻法連環画には、こうした農村社会の政治・経済の変遷も細かく反映されており、時代の変化についてゆけない読者にも、最新の「よりよい結婚」像を提供してくれる。




2　今年玉春是二十歲的人了，李大娘忙着給閨女找個好婆家。雖說有了婚姻法用不着說媒的，但大娘想：過河總要搭個橋，她就去找东院的老王婆商議。

1955年、第97期（6月6日）掲載の「春大姐」（「春ねえさん」、劉宝印・申申・李春昇・景啓民編絵、劉真の原著にもとづく）は、全編オールカラーであり、新婚姻法連環画が新たなステージに突入したことを示す作品である。

ヒロイン李玉春は利発な娘で、村では青年団の支部委員をつとめている。母親の李大娘は夫を早くに亡くし、この一人娘をたいそう可愛がっていた。玉春が二十歳の年、李大娘は娘の縁談を老王婆に頼みに行く【左上】。

キセルを吸い、野犬を連れた老王婆は、封建的な「包辦婚」を請け負う仲人業者であり、キセルは「旧思想」、野犬は「流れ者」を意味する。服のボタンをきちんと留めていないのは、思想の乱れをあらわしている。



12　李大娘爲了閨女的親事，相了好多家，最後还是同意了老王婆拼命介紹的那個鎖上雜貨店的少掌櫃。这天，少掌櫃打扮得很整齊來到李家，李大娘就連忙招待。

ある日、玉春は、南村の団支部書記劉明華と運命の出会いを果たし、恋仲になる。一方、李大娘のほうは雑貨店の若旦那との縁談を進め、娘に引き合わせようとする。李家にやって来た若旦那は、鏡を前に髪を整えることに余念がない。このような行為は、彼が額に汗する労働者階級ではないことを示している【左下】。

玉春はもちろんこの話を拒否するが、李大娘は貧しい明華との結婚には反対である。ついに玉春と明華が結婚証書を見せると、玉春を家から叩き出してしまう。

その晩、明華の所属する「合作社」の社員たちは、社で婚礼を挙げることを決めた。婚礼の日、南村の「合作社」に招待された李大娘は、「合作社」が準備した玉春の嫁入り道具とぴかぴかの新居に目を見張る。

翌日、二人に連れられて「合作社」を見物した李大娘は、たくさんの荷車や馬、あふれんばかりの食糧を前にして、「今まで若旦那がいちばんの金持ちだと思ってたけ



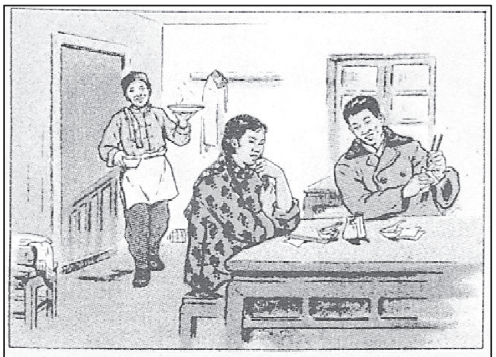

34　第二天，小兩口領着李大娘到社裏各处參观，李大娘看見合作社車馬成群，粮食滿囤，只說：从前我就以爲少掌櫃才有錢，看到这，他那點雜貨还比不上你們社裏的糞堆哩！

ど、これを見たら、あれっぽっちの雑貨あんたたちの肥やしにも及ばんわね！」と言い放つのであった【左上】。

「合作社」時代の連環画からは、婚姻法が親世代には効き目がないことがうかがえ、「よりよい結婚」の決めてとなるのはむしろ、あふれんばかりの食糧のほうである。

第 110 期（1955 年 12 月 21 日）の表紙は「毛主席朱副主席参観豊産社」（「毛主席と朱副主席は豊作の合作社を視察する」、麦桿画）という絵で飾られており、このテーマは同号に掲載の「春種秋収」（「春に種まき、秋に収穫」、芳樹改編、于雁・朱迪画、康疆の原著にもとづく。彩色）において反復される。

ヒロイン劉玉翠は貧農の娘だが、解放後に小学校を卒業している。しかし中学に受からず、都会に住みたいと思いながらも山あいの村に戻ってきた。そんな都会かぶれの彼女を、村の人は「結婚相手の条件は“両高、両相当”なんだと」と噂する。“両高、両相当”とは、地位も教養も高く、年齢と容貌がつりあっていることである。



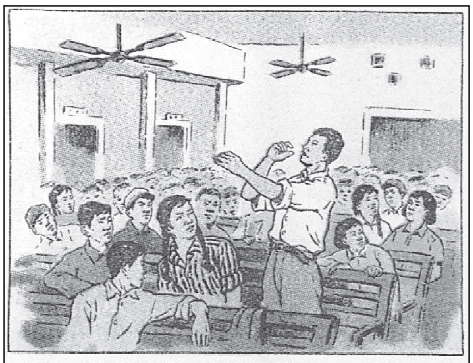
7　那幹部提出要跟她訂婚，並答应帮助她上中学。她把話扯过一边談起了学習的事，沒有同意訂婚，但也沒有乾脆拒絕。

冬、県のまちに出た玉翠は、百貨店の幹部と知り合い、あちこち遊びに行くうちに都会の生活に心を動かされる。幹部は彼女に婚約を申し込み、しかも中学に行けるようはからってくれるという。玉翠は婚約に同意もせず、かといってきっぱり断ることもしなかった【左下】。

この絵によれば、幹部の求婚は、食堂でなされた模様である。しかし、すでに見てきたように、新婚姻法連環画における求愛は、ひとけのない野外で行われるのが定番だ。給仕もいるようなパブリックな場で持ち出される結婚話は、やはり真剣さに欠けている。乙女心を解さないこの幹部は、食事前に食堂の箸をしっかりと紙で拭くような、良くいえば衛生的、悪くいえば不粋な男として描かれている。



11　她一个人跑回自己屋裏，对着鏡子想道：「唏！还打算要給我包办哩！也不看看是誰？周昌林初小都沒畢業，一輩子在山溝裏有啥出息！我碰見的那些縣區幹部哪个不比他强！」



26　第二天夜晚，又請她看电影。电影院裏的人不免有些吵鬧，那幹部站起來，裝模作样的吆喝了一陣。这作風，玉翠实在看不慣，就决心同他散夥了。



35　秋收後，他倆便結婚了。有人說：「他們恋爱的过程恰好是『春种秋收』，春天播了幸福的种子，秋天便得到了丰收啊！」

さて、まちから戻り、「互助組」に参加するわけでもなくぶらぶらしている玉翠に、両親は焦っていた。親戚のおばさんに隣村の周昌林という男を紹介されたので、両親はただちに仲人を依頼する。話を聞いた玉翠は、この「包辦婚」を言下に拒絶。部屋に戻った玉翠は、鏡に向かって毒づく。「周昌林なんか小学校も出とらんし、一生山の中で見込みなしだわ！」【左上】

その後、団の会議で批判された玉翠は、労働で人々を見返そうと、突然農作業に精を出す。鍬を直してもらったことをきっかけに、昌林に好意を抱き始める玉翠。意外にも昌林は物知りで、新聞も読めるし、国内外のニュースにも自分より詳しかったのだ。

夏、百貨店の幹部から手紙が届く。その文面の軽薄さに嫌気がさした玉翠であったが、考えた末、やはりまちまで会いに行く。誘われて映画を見に行った玉翠は、騒がしい場内の人々にもったいぶって注意する彼の姿に幻滅し、この男とは縁を切ろう、と心に決める【左中】。

まちから戻った玉翠は、今度こそ心を入れ替え、労働に精を出し、昌林と一緒に学習に励む。やがて収穫の秋が来ると、玉翠は昌林に向かい、かつて農業と昌林に誤った偏見を抱いていたことを告白する。今では彼女は故郷の土地を愛している。もちろん、昌林への見方もすっかり変わった、と…。

最後のコマは、夫婦となった二人が、この号の表紙と同様、豊作の麦を抱えている姿である【左下】。

農村の経済組織が作り変えられていく「合作社」時代は、新婚姻法連環画においても、「経済」が重要なテーマとなってくる。二作に共通して描かれるのは、雑貨店の若旦那や百貨店の幹部といった商人より、「合作社」の農民を選び、農業生産に従事する「よりよい結婚」像である。とはいえ、李大娘がそうであったように、結局は物質的な豊かさに目がくらんでいるといえなくもない。農村においては、貨幣価値よりも、現物が重視されていたようだ。

この時期の結婚を描く連環画には、こうした物質主義的な欲望を包み隠さない女性が登場する。もちろん、最後に改心する姿が描かれるのが常だが、油断ならないのである。

★おさげとおかっぱの関係

1950 年代の新婚夫婦の理想と現実を描くのが、第 163 期（1958 年 3 月 6 日）掲載の「小梁結婚」（楊夢義編絵。彩色）である。工員の「小梁」こと梁鳳章は 22 歳、李翠芳と結婚登記を済ませ、婚礼準備にとりかかる。「結婚するなら気張らなきゃ」と考える二人、新郎の小梁は銀行貯金を全額引き出し、翠芳をつれて百貨店に繰り出す。彼らが買ったものといえば…、口紅、おしろい、眉墨、おめでたい鳳柄の布団皮、柄物のスカート、カーキのレーニン服、ブルーストライプのポプリンのシャツ、流行の革靴、…ここで小梁の有り金が尽きた【左】。

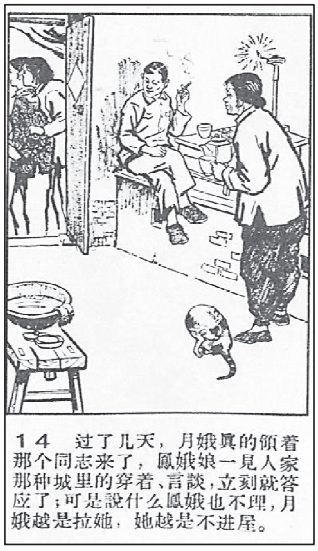



「婚礼が貧乏くさいとあたしたちがメンツをなくすのよ！」となじられた小梁、「まだ貯金があるんだよ」と嘘をついて職場に戻り、科長や同僚からお金を借りまくる。やっと婚礼は挙げたものの、翌月、借金の返済に追われ油代にも事欠いた二人は、上司に諭され倹約に励み、貯金して国家建設を支えることに目覚めるのであった。

この連環画が掲載された 1958 年 3 月には、すでに「百花斉放・百家争鳴」は終わり、事態は一転していた。1957 年より、共産党を批判した知識人を弾圧する「反右派闘争」が始まったのである。連環画における「よりよい結婚」像も変化を見せ、物質主義的欲望を描く連環画は、これ以降姿を消す。

この作品は教訓を示す内容だが、ここに描かれる婚礼準備のディティールこそ、実は逆説的に同時期の人々の理想の新婚生活を示しているように見えて興味深い。

さて、「反右派」時代の新婚姻法連環画は、善玉と悪玉をわかりやすく描き分けることが特徴となる。

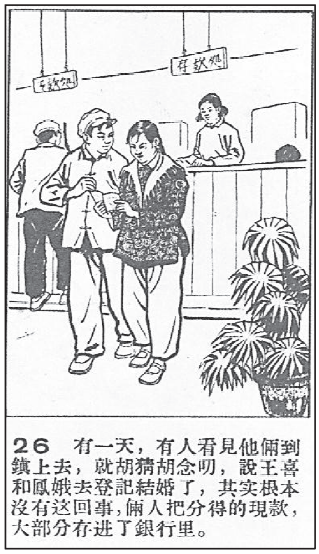






第152期(1957年9月21日)掲載の「光栄的道路」（「栄光の道」、孫曦作、郭重光・李恩雲画）には、「合作社」のよき一員を目指す農村の娘劉鳳娥と、鳳娥の年上の幼なじみで、鉄道局の幹部と結婚してまちに行った王月娥が対照的に登場する。鳳娥の母親は、月娥に娘の縁談を頼み、月娥は鉄道局の会計の男を鳳娥の家に連れてきた【左上14】。しかし、鳳娥はどうしても家の中に入ろうとせず、ついには母親と言い争いをしてしまう【左上15】。

二つのコマにおいて、都会から来た男と月娥はそれぞれタバコを手にしており、これはプチブル階級を示すしるしである。鳳娥の家の猫は喧嘩する母娘を見守っているが、連環画ではしばしば、動物や幼児が家庭内の問題を「傍らで見ている」構図が描かれる。



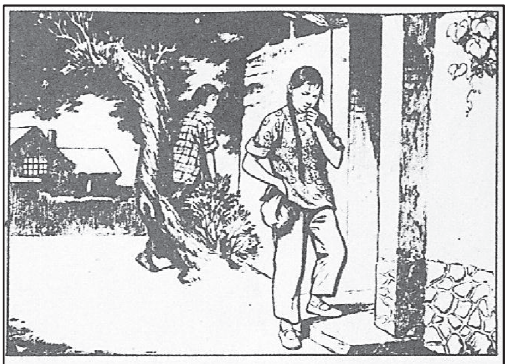

親の決めた相手を拒み、自分の選んだ相手と結婚するのが新婚姻法連環画の王道だが、この作品では、母親が利を貪ろうとしていない点に注目すべきだろう。婚姻法を説きに来た村の支部書記にも、母親は「娘婿のすねをかじる気はないさ」とはっきり告げている。

娘のほうも堅実であり、鳳娥は別の生産隊の青年王喜とひそかに愛を育む。ある日、役場らしき場所で寄り添う二人の姿が目撃される【左下】。すわ結婚登記か？ と

噂が流れるが、実は二人は労働で得た分け前をせっせと銀行に貯金しに行っていたのである。この時代になると、農村においても労働の分け前が現物支給ではなく、貨幣に換えられていたようである。

結局この作品では、婚姻法によって二人が自主的に結婚するところは描かれない。最後のコマでは村の支部書記が、母親にこう告げている。「この子たちは青年団に入団して、りっぱな合作社の社員になって、「成長」してから結婚するんだと！」

新婚姻法連環画でありながら、恋愛の過程や結婚が描かれないこの物語では、ヒロインにも母親にも、〈婚活〉する乙女たちが持っていた「よりよい結婚」への貪欲さのようなものが欠けている。この方向性がさらに典型化されるのが、第156期（1957年11月21日）掲載の「大菊和二菊」（「大菊と二菊」、歴剣改編、張白羽画、王慧敏の原著「我能愛她嗎」にもとづく）である。


2 大菊想看看高德旺，在他家門口轉来轉去，羞答答的不好意思进去。二菊心里也惦念着德旺，剛走到他家門口，瞧見大菊，便难为情的躲开了。

大菊と二菊の姉妹は、ともに合作社の青年突撃隊長の高徳旺に恋している。ある日、農作業中に徳旺が倒れたので見舞いに行くと、姉が先に来ていたため、妹はひっそりと身を引く【左上】。


8 晚上，团小組开会，团員都到齐了，只缺大菊一个人。高德旺問二菊：「大菊为什么不来？」二菊无可奈何的說：「她还在生气哩！」会上，大家对大菊这种态度提了很多意見。

姉の大菊は徳旺の家の前で何やら逡巡しているが、片手をポケットにつっこむ様子にどこか不穏な空気が漂っている。

はたして徳旺と大菊は交際を始めるが、結婚を急ぐ大菊は、仕事の手を抜いて「工分」（労働ポイント）を荒稼ぎしようとする。徳旺に見とがめられ、二人は喧嘩。夜の会議にも大菊は参加せず、徳旺に「姉さんはまだ怒ってるの」と弁明する二菊の心のわだかまりを、背後の影が物語っている【左下】。

あるとき、徳旺に隊の仕事を任された二菊は、トマト畑に成長促進剤を撒くよう大菊に頼むが、大菊は「工分」の取り分の少ないこの作業を嫌がる。さらに大菊は、農



21　夜里，二菊的病好了，睡得十分香甜。大菊总合不上眼，她恨德旺，更恨二菊；如果不是亲姊妹，真想和二菊拼了。……

作業中に具合の悪くなった二菊を徳旺が介抱しているのを見て、二人の仲を疑う。その夜、隣で眠る妹に嫉妬の炎を燃やす大菊【左上】。

この場面では、大菊と小菊それぞれの表情の対照性、寝床の中という「プライベート空間」における黒一面の背景が、生々しい迫力をもって大菊の心理状態をあらわしている。

その後、久しぶりに会った徳旺が雨の中トマトの様子を見に行くというので、大菊は怒りをぶつける。

「フン、あたしよりトマトが大事なら、いっそ終わりにしましょうよ！」

間の悪いことに、そこにずぶ濡れの二菊が駆け込んでくる。

二菊はトマトが風雨で倒されたことを知らせに来たのだった。「誰かさんが手を抜くから」と二菊に責められた大菊は、「何さ、畑で抱き合っていたくせに！」と妹をなじる。二菊は怒りのあまり泣き伏し、徳旺の家を飛び出してトマト畑に向かう。激しい姉妹の喧嘩に呆然とする徳旺だが、彼もまたトマトを救いに畑に向かい、二菊と協力してトマトを縄で固定する。



35　雨停了，活也做完了。在回去的路上，德旺本想吐露一下爱慕二菊的心意。但是，二菊却抢先说：「姐姐误会我們了！她虽然有錯誤，可是真心爱你的！今后，你可要更多的帮助她呀！」因此，德旺想說的話又嚥下去了。

雨が上がり、帰り道で二菊に愛を打ち明けようとする徳旺。二菊はそれを察して先手を打つ。「姉さんは誤解してるのよ！ これからは、もっと姉さんを助けてあげて！」――言いかけた言葉を、ぐっと飲み込むほかない徳旺であった（完）【左下】。

…いかがだろうか。それぞれの思惑が細かく描かれているにも関わらず、誰の恋心も実らない。実るのはトマトだけ、それがこの時代の連環画である。1957 年 10 月には、毛沢東が「15 年でイギリスに追いつき追いこす」と宣言し、翌 58 年には、第二次五カ年計画、人民公社の設置、前年の倍近い穀物・鉄鋼の生産目標が決定される。この「大躍進」政策は、結局は経済の混乱を招き、自然災害も重なったため、中国全

土で二千万人を越す餓死者を出した。この頃の乙女には、〈婚活〉に身を入れる余裕などなかったと思われる。

この作品では、姉の大菊が「おさげ」、妹の二菊が「おかっぱ」であることにも注目したい。1960 年代、京劇の現代物に改編に改編を重ねて作り上げられていった「様板戯」（文化大革命期のプロパガンダ芸術、革命模範劇）では、おさげは指導者に導かれる娘、おかっぱは女性革命戦士と相場が決まっている。おさげは未婚、おかっぱは寡婦か単身である。

したがって、年齢順からいえば姉がおかっぱ、妹がおさげでもよさそうなものだが、ここでは姉は「未だ目覚めぬ者」としてのおさげ、妹は「高い自覚を持つ者」としてのおかっぱなのである。連環画の中には女性の偉人、とくに女性革命戦士の伝記物というジャンルがあるが、やはり髪型はおかっぱに描かれることが多い。

また、怠惰な姉と勤勉な妹という設定は、「勤労」をテーマとした児童劇『馬蘭花』（任徳耀作、1955 年）に見られるものである。『馬蘭花』は 1960 年に映画化され、現在まで繰り返し再演されている息の長い名作であり、悪玉の姉貴分と善玉の妹分という「光栄的道路」「大菊和二菊」の二作に共通するイメージの固定に影響を及ぼしているのかもしれない。

### ★乙女たちは労働に忙しい

1958 年以降、『連環画報』において新婚姻法の登場する連環画はめっきり少なくなり、結婚や婚礼自体がテーマとして描かれなくなる。かわりに登場するのが女性のトラクター運転手、女性党員、女工などの活躍を描く偉人物である。中国では国際女性デー（3 月 8 日）を祝うことから、『連環画報』においても、3 月 6 日刊行の号には女性を描く連環画を数多く掲載する傾向がある。58 年までは、そこに新婚姻法連環画を見つけることも珍しくなかったが、59 年、60 年の同時期の号からは姿を消している。

1959 年、60 年あたりの乙女はとにかく労働に忙しく、結婚や家庭は二の次である。女性を主人公とする連環画において、彼女たちは単身もしくは家庭状況が不明、あるいは設定の上で夫婦として登場するものの、恋愛や結婚生活の描かれない作品がほとんどである。



6　汽車进了工厂区。高大的起重机、象蛛網似的脚手架、来回奔忙的人群，从車窗外飞快的閃过，紅玉直盯着看。小刘笑着說："怎么样？我們工厂比你們农村緊張热鬧吧？"

『連環画報』が停刊する直前、第 219 号（1960 年 7 月 6 日）掲載の「紅玉」（蕭源錦改編、康済画、馮還求の原著にもとづく）にいたっては、製鋼工員春生の妻紅玉は、共産党の呼びかけに応じて農村で農業生産に従事しており、夫の春生が病気になったと聞いて、まちに戻ってくる。しかし、一年ぶりのまちの変化は著しく、高くそびえる真新しいビルに彼女は感嘆し、夫の身体の心配も吹き飛ぶほどである【左上】。

絵は、夫の友人の運転する車で工業区を走る紅玉。この作品には、横長のコマと縦長のコマが混在し、人物のバストアップや表情のアップ、遠近法の使用など、画面構成上の工夫が凝らされている。なかでも、車のスピードをあらわす効果線や、車内から工業区を眺める紅玉の風になびく髪が、疾走する女性の躍動感を描いているところは、作品のテーマに関わる重要なポイントだろう。



25　紅玉發現了春生，把头伸出窗外叫道："我留的条子你看見了吧？我回水庫工地去了！再見！多写信来！"列車慢慢加快了速度，向东飞馳，她沒有听見春生的回答。

やがて春生がすでに回復し、仕事に復帰したと聞いた紅玉は、夫に会うのをやめて、自分もすぐさま農村に戻る。動き出す列車の窓から、紅玉は自分を追ってきた春生を見つけて叫ぶ。「ダムの工事現場に戻るわ！　さよなら！」【左下】

1950 年代、新婚姻法発布に始まる「よりよい結婚」像を宣伝してきた新婚姻法連環画の役目も、このあたりで完全に任務完了というところである。社会主義国家の一員として生きる彼女にとっては、党こそが大きな家庭であり、結婚による個人の幸せなど眼中になさそうである。

紅玉のように、未婚・既婚に関わりなく、党という大家族の一員として単身で活躍するおかっぱ女性は、50 年代末から 60 年代にかけて連環画の偉人物、あるいは「様板戯」に数多く登場する。こうしたおかっぱ女性の末路を戯画化して描く映画として、

文化大革命終結後に作られた『芙蓉鎮』（古華原作、阿城・謝晋脚本、謝晋監督、1986）は興味深い。

この映画に登場する李国香という共産党女性幹部は、かつてのプロパガンダ芸術ではけっして触れられなかった「性」の問題によって失脚する。中国の映画研究者戴錦華は、物語の中で文革が終わった後、この「歴史の暴力の具現化である「淫乱」な女、李国香」に対し、「男性主人公秦書田のさりげない一言「まだ結婚していないんでしょう？」による懲罰」が加えられる場面を見逃さない。50 年代、乙女たちを〈婚活〉に駆り立てた新婚姻法と「よりよい結婚」像は、60 年代には単身で労働する女性像に取って代わり、しかし 80 年代には、彼女たちはふたたび新たな「よりよい結婚」像によって、かつて行った選択を裁かれるのであった。

ところで、〈婚活〉する乙女たちに代わり、連環画の新たなヒロインとなった労働する乙女たちについても、生産競争をめぐる争い、ライバルとの友情など、興味深い作品がたくさん描かれている。労働する乙女たちを描く連環画では、結婚や恋愛の問題がテーマとならない分、物語の葛藤は女の子同士の間に起こる。それら女の子同士物の連環画については、また別の機会に眺めてみることにしたい。

**〈参考文献〉**


山田昌弘編著『「婚活」現象の社会学』、東洋経済新報社、2010 年。

関西中国女性史研究会編『中国女性史入門――女たちの今と昔』、人文書院、2005 年。

傅謹『新中国戯劇史：1949-2000』、湖南美術出版社、2002 年。

牧陽一・松浦恆雄・川田進『中国のプロパガンダ芸術』、岩波書店、2000 年。

新鳳霞「評劇劉巧児的創作過程」、『戯劇報』1955 年第 2 期。

姜維樸「新中国連環画芸術的六十年」、『新中国連環画 60 年』上、人民美術出版社、2010 年。

武田雅哉「〈小人書林迷走録〉第 2 回 連環画定期刊行物あれこれ――絵のある雑誌に迷いたい！」、『連環画研究』1、2012 年。

岩間一弘「第三章 集団結婚式――消費する大衆、動員される大衆」、『上海大衆の誕生と変貌 近代新中間層の消費・動員・イベント』、東京大学出版会、2012 年。

孫瑜口述、李緒基・孫永都記録「関於我如何編導電影『武訓伝』的一些真実状況」、『斉魯学刊』1986 年第 1 期。

孫瑜「我編導電影『武訓伝』」、『春秋』1996 年第 3 期。

奥田寛『中国人の非言語コミュニケーション』、東方書店、1997 年。

田村容子「任徳耀作『馬蘭花』解題」、話劇人社・中国現代戯曲集編集委員会編『中国現代戯曲集 第七集――児童青少年演劇特集』、晩成書房、2008 年。

戴錦華著、宮尾正樹監訳、舘かおる編『中国映画のジェンダー・ポリティクス――ポスト冷戦時代の文化政治』、シリーズ〈国際ジェンダー研究〉別巻、御茶の水書房、2006 年。